

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-133	15-112	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
<b>題名 (原題/訳)</b>		
The Prospective Joint Effects of Self-Regulation and Impulsive Processes on Early Adolescence Alcohol Use. 思春期の飲酒における衝動と自己制御の思考過程の予測される連合効果		
<b>執筆者</b>		
O'Connor RM, Colder CR.		
<b>掲載誌</b>		
J Stud Alcohol Drugs. 2015 Nov;76(6):884-94.		
<b>キーワード</b>		<b>PMID</b>
思春期、自己制御、衝動の過程、意欲		26562596
<b>要 旨</b>		
<b>目的：</b> 思考過程システムの二重過程理論は、ふるまいが衝動（反射、自動）と自己制御（熟慮、制御）という二つの思考過程の相互作用に影響されると主張する。この理論を適用すると、飲酒行動に対する衝動（暗黙のアルコール認知）は自己制御能力（抑制および活性化制御）や自己制御意欲（アルコールの影響への否定的見解）（N-AOE）の影響を受けると仮定づけられる。本研究の目的は、これらの三要素の相互作用からなる飲酒行動の思考過程を、青年期の1年間の飲酒行動予測において検証することである。		
<b>方法：</b> 対象は西ニューヨークの325家族（内女性54%、平均年齢ベースライン時13.6歳、追跡時14.9歳）で大多数が白人/非ヒスパニック系（76%）であった。家族の平均年収は6万USドルであった。Single Category Implicit Association Test (SC-IAT)の結果と、飲酒行動の予測値と自己報告を評価した。また自己制御能力（抑制および活性化制御）は親の報告に基づいた。		
<b>結果：</b> N-AOEと（抑制および活性化制御）は、（暗黙のアルコール認知）が1年間の飲酒行動に及ぼす影響の調整要因であった。予想通り、（暗黙のアルコール認知）に対する否定が弱い者は、N-AOEと（抑制および活性化制御）の両方が低い場合、飲酒行動のリスクが上昇していた。仮説に反して、（活性化制御）とN-AOEの両者が高い場合、（暗黙のアルコール認知）に対する否定の弱さは飲酒行動との関連を認めなかった（ $p=0.717$ ）（vs N-AOEか（活性化制御）のどちらか一方が低い、 $p<0.01$ ）。自己制御能力（活性化制御）は社会行動において、事前計画し行動する能力を反映している可能性がある。		
<b>結論：</b> 自己制御能力が高くても単独では、（暗黙のアルコール認知）に対する否定の弱さが飲酒行動に及ぼす効果を和らげるのに十分ではなかった。また、自己制御能力の低さは、（暗黙のアルコール認知）と飲酒行動との関連に影響していなかった。本研究は飲酒行動が衝動と自己制御の二つの思考過程の複雑な相互作用によって影響されると提言する最近の理論を支持している。		